

Woods, Peter, 1988, "Educational Ethnography in Britain" In Sherman R, Robert & Webb B, Rodman, *Qualitative Research in Education: Focus and Methods*, pp.88-107.

(ウッズ、「イギリスにおける教育学的エスノグラフィー」)

イギリスの教育学的エスノグラフィー (p.88)

- ・ この 15 年間イギリスの教育研究ではエスノグラフィーの研究が急増し、最も一般的な質的研究法になっている。
- ・ エスノグラフィーへの関心は日常生活において自明のものとして用いられているカテゴリーや現実の社会的構築に焦点を当てた「新しい教育社会学」の登場によって引き起こされた。
- ・ シンボリック相互作用論は、この分野の理論的背景として重要な位置を占めている。
 - ・ シンボリック相互作用論とは、人びとによる事象の解釈や意味づけのプロセスに着目する立場である。
- ・ 本論文では、エスノグラフィーの長所と思われる部分の説明に重きを置く形で、既存の研究成果を取り上げる。

エスノグラフィーが明らかにしてきたこと：イルミネーション (pp.89-90)

- ・ エスノグラフィーの多くは、通常の記述と異なり、表面的な外見の下にある現実を明らかにすることを目的にしている。これは学校教育についての「公式の説明」¹とは対照的なものになる傾向がある。
- ・ 例えば、教授法と教師のストラテジーの問題についての研究がある。それらの研究は、生徒の学校での成功は、教師の意味体系を受容することに起因していることをはじめとして、教師が学級や学校をコントロールするのに用いる方法を明らかにしてきた。
- ・ 他にも、Woods (1979) は教師たちが一方では仕事への救いようのない献身(家族や住宅ローンの支払など)、他方ではどうしようもない不満(学校のモラルや生徒のモチベーションの低下など)の間で揺れ動きながら、なんとか日々の業務をやりくりしていることを「サバイバルストラテジー」と呼んでいる。
- ・ このような記述は学校教育についての「公式の説明」とは対照的であるが、調査結果を対象者にフィードバックすると、「真実味がある」ものとして受け取られる事がある。
- ・ 教師の研究と同様に、子どもが用いる戦略についてもエスノグラフィーは明らかにし

¹ 「公式の説明」や「公式の定義」とは、「新しい教育社会学」やその影響を受けた「批判的教育学」でしばしば用いられる表現である。これらの研究は、権力関係の中で正統化されているものの裏側にある現実を暴露することを目的とする点が共通している。そのため、「公式」が意味するのは、行政文書などの公的なテキストだけではなく、「表向きの」や「正統とされる」なども含まれている。

てきた。

視野の広さ (pp.90-92)

- ・ エスノグラファーは、自分の認識と能力の限界を踏まえながら、一つの人間集団に特徴的なあらゆる要素の関係を徹底的に記述することを目指している。このホリスティックな性格はこのアプローチの特徴の一つである。
- ・ ホリスティックなエスノグラファーが提供してきた知識の例として、生徒の視点から見た「良い教師」に関する研究がある。多くの研究で生徒が教師を次の 3 つの基準から評価していることが示唆されている。それは、①教師が学級をコントロールできているか、②うまく教えることができているか、③公的な役割の域を超えて個性を発揮できるだけの人間性があるかどうかの 3 つである。
 - 例えば、生徒に対して生徒としての役割のみを押し付け過ぎたり、ジョークなどで人間関係を親密に築くことができない教師は忌避される。
- ・ 生徒による教師の評価には、生徒のアイデンティティも関係している。生徒のアイデンティティに関わるものとして次の 3 つの能力要素がこれまで指摘されてきた。
 - 友情：親しい友人がいなければ、生徒のグループから排除されてしまう。友人関係のパターンが学校卒業後の進路選択に影響を与えることもある。
 - 学校内での地位：学校に適合的な生徒は、成績に地位を見いだす。反対に、反学校的な価値観をもつ生徒は、非行に地位を見いだすことがある。
 - 能力：「成績優秀者」「エース級の逸脱者」など、自分の能力についてのカテゴリーを利用して自身のアイデンティティを好ましい形に作り上げていくこと。
- ・ 生徒の教師に対する考えや生徒の文化的価値観について、すべてが解明されているわけではないが、著者はこのような問題圏に対して、エスノグラファーは有用な視野を広げてきたことを指摘する。

バランス (pp.92-93)

- ・ 1970 年代初頭、「新しい教育社会学」の動きが広まった頃、個々の機関でエスノグラフィーを行うことは習慣化していた。当時は発見すべきことがあまりにも多く、また、問題を予め定義するのではなく、「問題を作る」ことに関心が持たれていたため、どこから何を対象に研究を始めるかは問題ではなかった。
- ・ しかし、その後エスノグラファーは、学校における不平等や欠陥を見いだすようになり、それが学校生活についての十全な記述や理論構築を可能にした。
 - 例えば、Lacey (1977) は教師の社会化に関する 3 つのモデルを提案した。彼のモデ

ルにより、データ分析とモデル構築の健全な相互作用を確保することができる。

- データ分析とモデル構築の間でバランスを取っているエスノグラフィーのもう一つの例は生徒の学校適応の分野で見られる。
 - これまで生徒の類型は「適合者」vs「非適合者（逸脱者）」といった大まかな二分法が用いられてきた。しかし、エスノグラフィックな調査はこのような分類が不適切であることを指摘してきた。
 - 生徒の学校適応の類型を広げる一つの試みとして、Merton (1975) の研究が参考にされた。Merton は、【公的な目標】と【その達成の手段】の受け入れ／拒否の組み合わせに基づいて、社会秩序への適応の5つの理念型²を提案した。このMertonの機能主義モデルは相互作用論的な展開を経て、Woodsによってさらに拡張された。
- 相互作用モデルの開発は、一部は経験的研究に、一部は仮説に基づいて行われており、これまで無視されてきた広範な可能性に研究者の注意を向けさせている。このようなモデルは、他のエスノグラフィー研究にも役立ち、理論の発展を促進する。

理論 (pp.93-95)

- エスノグラフィーは、それが実態のない些細なものであり、終わりのない記述ともっともらしい話の連続として批判されることがある。しかし、エスノグラファーの関心は単なる記述にとどまらない理論の発展にある。
 - 初期のエスノグラフィーの多くが単なる記述のレベルに留まっていたのは事実かもしれないが、それはエスノグラフィックなアプローチの必然的な結果ではない。
 - イギリスのエスノグラファーは、一次的な構成要素³を重視し、主に単独で個別の事例研究を行ってきた。その多くは大量のケースをカバーし一般化することを目指したのではなく、個々のユニークな事例をよりよく理解するために努力する必要があるという信念に支えられている。
- 前節で挙げたいくつかの分野におけるエスノグラフィーは、Glaser&Strauss (1967) が理論開発を成功させるために必要だと示した「飽和」に達している。個々のエスノグラフィーは、それ自体が理論を構成するものではないが、その積み上げによりヒューリスティックな枠組みを提供することで事象の説明を用意にしている。

² それぞれ順応（目標と手段の受け入れ）、革新（目標を受け入れ、手段は拒否）、儀式主義（目標を拒否、手段を受け入れ）、退却主義（目標と手段の拒否）、反抗（目標と手段を拒否し、両方を別のものに置き換える）

³ ここではA.Schutzが言及されている。Schutzは外部からの観察により再構成された現実を二次的な構成と呼び、事象の当事者たちにとっての現実を一次的構成と呼んでいる。

- ・ 時には、エスノグラフィーが理論的な伝統や研究分野に累積的かつ競合的な形で貢献することがある。その一例が生徒文化の研究である。
 - Hargreaves (1967) と Lacey (1970) は、初期の二つの研究で親学校的・反学校的という二つの対立する生徒のサブカルチャーモデルを提唱した。
 - これに対して、Furlong (1976) はこれらのモデルがサブカルチャーの規範の力を過大評価していると批判し、生徒集団は不安定なものであることを指摘した。そしてその不安定な性質を強調するために、「相互作用セット」という枠組みを提唱した。「相互作用セット」は、生徒たちがグループを形成するのはある特定の状況の意味付けに同意している時であると捉えるため、同じ生徒が異なる時期に異なる相互作用セットに参加していることの説明が可能になった。
 - 上記の研究は、社会学における決定論と自律性をめぐる長期的な議論に競合する説明を提供したとみられることもある。しかし、決定論と自律性を一つの次元の極として見るならば、彼らの研究はそのバランスの中で累積されてきた知見として捉えられるだろう。つまり、「相互作用セット」の説明は、学校の内部組織や社会構造的要因の規定性を排除するものではない。
- ・ エスノグラフィーはマクロとミクロの領域やアプローチをめぐる議論にも関係している。
 - エスノグラフィーはしばしば状況主義的⁴であると批判されることがある。そのような批判に対して重要な貢献をしたのがマルクス主義への関心の高まりであった。
 - マルクス主義は、エスノグラフィーや相互作用論だけでは十分な説明ができず、学校の外部からの力（権力やイデオロギー等）も考慮に入れる必要があると主張した。
 - エスノグラフィーを完全に放棄するマルクス主義者もいたが、弁証法的に理論に組み込もうとしたものもいた。例えば、Sharp & Green (1975) は、子ども中心主義という進歩主義的な理念と反進歩主義的な教室の現実を対比させながら、進歩主義が学校教育における不平等の永続を正当化するレトリックになっていると主張した⁵。
 - エスノグラフィーとマルクス主義を融合させる独創的な試みとして Willis (1977) が挙げられる。彼は都会の中学校に通う労働者階級の「若者」グループの雰囲気や文化的な側面の細部を描き出している。
 - Willis の試みはマクロレベルを説明するためにマルクス主義を援用したものとして評価できるが、マルクス主義だけが唯一の選択肢ではないことには注意が必要である。ミクロ-マクロの分析レベルの問題は今後も社会学者の頭を悩ませるだろう。しかし、Willis の試みが示したように、その議論はエスノグラフィーの記述を豊かにし、社会学の理論の活性化にもつながっていく。

⁴ 得られた知見が文脈依存的であり、個別の事例から理論的な議論への接続が難しいことを揶揄していると考えられる。

⁵ ただし、Sharp と Green の研究に対して、相互作用論者からは教師自身の意味の構築を十分に分析していないという批判もなされている。

教師の実践 (pp.95-98)

- ・ エスノグラフィーは、教育における理論と実践の間の距離を縮めることもできる。多くの教師にとって社会学は、難解で専門用語を多用する学問であり、役に立たない。しかし社会学者、特に学校の変革に貢献を望む者にとって、エスノグラフィーは上記の溝を埋める役に立つ。
- ・ なぜなら、エスノグラフィーは(a)教師が自分ごととして認識している本質的な問題に関心を持ち、(b)教師たちの問題を扱い、(c)教師たちの見解、価値観、動機を重要視し、(d)さまざまな状況における教師らの行動の意味を考慮に入れ、(e)記述や理論を用いる際に、学校で用いられている概念や用語を用いることさえあるからである。
- ・ エスノグラフィーのアプローチは、教師を重視し、理解を深めることによって、教師が自身の日常の出来事をよりコントロールできるようになることに貢献する。結果として自らの実践に変化をもたらすことができる。
- ・ 教師にとってのエスノグラフィーの実用性は生徒の逸脱行為の研究に示されている。この研究では次の3つの疑問が提示された。①誰が生徒の行動を逸脱と定義するのか、②逸脱するのは誰か、③彼らは何から逸脱するのか。
- ・ ①の問いについては、教師が現実を定義することに焦点を当てた研究に見られる。また、②の問いについては、生徒が教師に対してどのような個人的パースペクティブを持っているのか、学校組織によってどのような生徒文化が生み出されるのかが明らかにされてきた。最後に③の問いについては、教師—生徒間の微妙な平衡関係との関わりのもとで、逸脱が定義されようとしている様相が描き出されてきた。
- ・ 教師がおかれている根本的な現実を表面化させることは、教師による自身についての状況の診断を助けるという意味で、教師の実践に大きな助けとなる可能性がある。薬と同様に、正しい診断は治療への近道となる。

反省性 (reflectivity) (pp.98-99)

- ・ エスノグラフィーは、その反省的な可能性を通じて教育実践や教師の満足にも貢献する。
- ・ 相互作用論者は、Mead (1934) の「自己」についての議論を援用することで、自己が他者との関係の中で形づくられることを強調している。例えば、教師の自己に関しては役割を「受け入れる」よりも「作る」ことが強調されている。それが教師のライフヒストリー研究や、ストラテジー研究へと接続していくこととなる。
- ・ 特に教師のライフヒストリー研究は教師の主観から、教師が抱える困難やキャリアの進み方を議論してきた。そのような研究は、ある種の「治療的」な価値があるかもしれない。

い。実際、多くの教師が研究者に対して話すことを楽しんでいると言うことがある。

エスノグラフィーのいくつかの問題点 (pp.99-101)

- ・ここまでエスノグラフィーの長所と成果に集中してきたが、問題点がないわけではない。例えば、ミクロマクロ問題や、(それは時に回避可能であるが) 経験主義に対する過剰な懸念などである。
- ・後者の点については、近年の調査期間の短さ(スナップショット的である)が批判の対象となっている。この問題点は、一人の研究者が一度に一つの事例研究を行うという伝統的な手法の性質に起因している。
 - ・この問題を解決する一つの方法は、何らかの形でチームを組織することである。チームを組んで調査することは多面的な調査を可能にするという利点もあるが、エスノグラフィーの高度に個人的な性質とは相容れない側面がある。
 - ・もう一つは、エスノグラフィーの非歴史的な性質に触発されたライフヒストリー研究である。
 - ・この二つの方法には多くの類似点がある(例えば、検証の形式、キーインフォーマントの使用、分析方法など)。また、ライフヒストリーは、教師が深く関与することで、教師の内省の可能性を高め、教師が理論と実践の間に感じる伝統的なギャップを埋める機会を提供することができる。
- ・エスノグラフィーの「運動」における永遠の課題は、研究のコーディネーションである。個々の事例を重視するため、調査結果の調整は難しい。しかし、同じことを繰り返し発見することにはあまり意味がない。
 - ・著者は以前第1段階の研究と第2段階の研究を区別した。前者は経験的な研究であり、経験的なデータを超えて理論を展開することはない少ない。後者は調整的・分析的な研究であり、類似した本質的な問題について様々なエスノグラフィーを検証し、正式な理論を構築することで、新しいエスノグラフィーのための理論的基盤を確立することを目的としている。第2段階の研究は進行中であるが、今後求められている。
- ・シカゴ学派の理論的な先達と同様にイギリスのエスノグラファーは、権力をもっていない人びとに集中していると批判されることがある。
 - ・しかし、その傾向が仮にあったとしても、当初の目的に照らして研究者は権力の構造に入り込む努力をしなければならない。
- ・以上のように、エスノグラフィーにはまだまだやるべきことがある。エスノグラフィー自体は完全なプログラムでもなければ完璧なものでもない。エスノグラフィーは今後も

方法論を洗練させ、隠れた領域をマッピングし、理論を発展させ、ミクロ-マクロのインターフェイスを検討し、関連する他の方法論との提携を模索し続ける必要がある。